



Title	中南米名曲物語2：彼女はカリオカ（ブラジル・リオ生まれ）
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81445
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

彼女はリオ生まれ，リオの美青年聖者， Crossways in European Humanities

中南米名曲物語 2：彼女はカリオカ（ブラジル・リオ生まれ）

楽曲「彼女はカリオカ」(1963) 作詞：ヴィニシウス・デ・モラエス，作曲：アントニオ・カルロス・ジョビン

「見る」「知る」「アーカイブ」の「るるぶ」CSCD 電子学際支援サービス・カードを作成して
いこうと始めています。みなさんのお知恵を貸して下さい。



写真(左)：ベルガモ高地中心部にあるサンタ・マリアマッジョーレ教会(オペラ作曲家ドニゼッティの墓がある)内にある宗教画「聖母子と聖ロクスと聖セバスティアヌス」(撮影：2007.3.16).

2007 年 3 月 12 日(月) —— リジュボア新大学において欧州大学間単位交換による人文系大学院修士コースの昨年話をきいたブラジル人，リオ育ち，「彼女もカリオカ(エラ・エ・カリオカ)」，彼女がちょうどベルガモで第 4 セメスターを迎えていることが分かった。同月 15 日-16 日イタリア北部ベルガモで週末にかけて数回にわたって彼女にインタビューした。今回の修士課程に在籍する 24 名のうちの一人で，彼女は言語的な有利さから第 1,3 セメスターにリジュボア新大学を選び，「比較神話学」をテーマとして中間報告を同大学で済ませていた。第 2 セメスターは，高校の頃から学んだフランス語の高い言語運用能力を生かして仏ペルピニャン大学を選び，その時期に以後の博士後期課程の進学先としての心積もりをしたようであった。ベルガモでは，同じロマンス系言語とは言え，少々距離感のあるイタリア語に苦戦し，10 月から半年を経過していた 3 月においても口語はともかく，文語

には苦勞していると話し、イタリア語習得に大いに助けとなる古典ラテン語の学習を真剣に始めようとしていたところであった。

1920年代旧ソ連スターリン体制下ユダヤ狩り前夜状況を察知して中南米へ逃避行したユダヤ系ブラジル人の3世にあたり、また94年W杯で24年ぶりの優勝以来、黒人層など絶対的貧困層の識字率を上げるための教育投資が社会党政権誕生とともに充実した一方で高等教育機関が予算削減など冷や飯を食らう現状に直面し、難局を打開すべく渡欧してきたとのこと。また、フランス映画大好きで、また祖父の国ロシアへの憧憬からか、タルコフスキーも大好きで、DVD「惑星ソラリス」(音声2言語吹き替え、日本語字幕も含む13言語字幕版)を見せると大喜びで、その場で冒頭登場する近未来都市をイメージした東京市街地の高速道路撮影のことを指摘するとまじまじと映像に見入っていた。彼女の欧州での成功を祈念して別れた。その後も電子通信で遣り取りを継続し、2007年10月無事にペルピニャン大学に進学したと朗報を受け取った。

(<http://www.imageforum.co.jp/tarkovsky/wksslr.html>; <http://www.ruscico.com>)

ベルガモ市のあるロンバルディア州(王国)は7世紀末黒死病流行地域として知られ、3世紀末キリスト教迫害のローマ帝国における受難の年輩・第一歩兵隊長セバスティアヌスはペストとは何の関係もなかったが、ペスト菌可視化の象徴として体軀にめり込む矢が格好の素材とされ、「矢により死に至らなかった」殉教蘇生奇蹟物語が中世末期「ペスト除け護符」となり、美青年聖者崇拜(口承譚)に変容するが、そうした宗教的精神支援は近世になって疫病の奇蹟的治癒者聖ロクス(胸元刻印紅色十字架)に継承される(添付ファイル参照)。また1月20日が聖セバスティアヌスの祝日(命日)でその時期ポルトガル艦隊がリオに上陸したことから、リオの守護聖者となった。ブラジルにわたった図像は、熱帯雨林のゴム樹液採取労働者を熱帯病(マラリア、黄熱病)から保護する「お守り」として社会的役割を変貌させた。象徴人類学をモチーフとした拙著『入門やさしいポルトガル語』(南雲堂、1997)、276ページ図像参照。

さてこの絵画の物語性を考察すると、ベルガモ高地の宗教・大学・貴族館建築群を背景に、聖母は聖セバスティアヌスと視線を交わし、聖者は肉体に鋭く突き刺さる矢を誇示しながら、まだ救済の役割は果たせると自信をのぞかせるものの、聖母曰く「あなたの黒死病除け聖者の役割は既に終わりました」と聖者を睨みつける。その哀れなる落胆ぶりは、聖母臀部からそっと顔をのぞかせる同情する天使の陰翳ある表情にも垣間見られる。左側に時代を異

にする聖者ロクスが森林で孤立して忍耐強く死期を待つものの、見知らぬ猟犬の運ぶ糧で延命し、左太腿部の腺ベスト痕を示しながら、右手で誘導、天使来臨を待望している様子である。聖母の指差しに一瞬戸惑う足下の天使は雲を掴みながら、両翼をきっと立て、今にも飛ぶぞと顔面緊張感をみなぎらせる。聖者の求めに応じて、聖者自身の救済よりも、救済現場を見据えて、下界への降臨に意欲をのぞかせている。特に聖母が右足指で頭を押さえ付け、天使は否応なく眼下に広がる衆生が苦しむ罹患状況を直面しているのである。

聖者間の社会的役割の交代劇を示唆するものであり、矢射殺蘇生聖者(セバスティアヌス)は表象的価値の変容を経て、芸術作品描写対象という排他的な特化を遂げ、最終的に世にも稀なる美青年像を写す審美的鏡の役割を担うことになったのである。

写真(右)：ベルガモ市街地でよく見かけたピザ・パン屋。さすがだと思い、ピザ発祥国を舌先触感で堪能した。一方、移民大国ブラジル・サンパウロは世界の食文化が集結するが、中でもイタリア人街ビシーガ(Bixiga)には数多くの屈指の料理屋が軒を並べ、食材も安価で、イタリアよりも味も絶妙、量もたっぷりあると喧伝される。

(出典：[活動情報：中南米名曲物語2：彼女はカリオカ\(ブラジル・リオ生まれ\)](#)，CSCD，2008.3.2)